せつな系植物楽（しょくぶつがく）
植物ぽろぽろ

絵・文 鵜島直美

オニ葉 ひょうたん

一生懸命目を掛けていた実よりも、全然目を掛けていなかった実が、不思議と大きくなる。だから「ヒョウタンは、見たら生（な）らない」

そう聞いて、ほったらかしにされてスクスク育つ「野生児ヒョウタン」と思い込んだ。そのイメージはいつしか、「野生のヒョウタン」に姿を変えた。これが始まりだった。ヒョウタンおばけの…。

夏たけなわ。友人Sと私は、山の中の観光地にあるマッチ絵画家T太郎さん宅を訪れた。話し上手のT太郎さんは、海軍時代のこと、絵の

こと、食べ物や生活の話なんかを、風に揺れるクスノキの葉のざわめきのように、語り聴かせてくれる。半年ぶりに会ったその人。話さない、ごはんも食べない、絵も描かない。死ぬことばかりを考えて生きていた。どんな言葉も届かない。倒れかかったクスノキを囲んで、奥さん、息子のK太くん、友人Sと私、みんな萎れた。

うだる暑さの中。観光客とそぞろ歩き、小さなお寺に詣でる。賽銭箱に小銭を投げ入れ、鐘をゴンゴン打ち鳴らし、両手を合わせる。知らない人のお墓、道端のお地蔵さま、白く凍った生ビールのジョッキにも。指で書く「Tタロウサン、元気ニナレ！」。

トウモロコシ畑の奥で、おばけヒョウタンと出遭った。杉の木の落とす怪しい陰の中、一メートルはあるヒョウタンの実が、ゆらゆらいくつも揺れていた。眩い命の輝きが、ゆらゆらゆらゆら…ヒラメイタ！　T太郎さんにプレゼントしよう。

初めての経験だった、誰かのために実を採るのは。どきどきした。あまりの大きさに採るのを一瞬ためらったが、「T太郎さんのためならエーンヤコーラ！」命のつまったヒョウタンの実を、爪の先を真緑色に染めながら、ひきちぎった。

にこにこしながらT太郎さんに差し出すと、半歩退き、世にも恐ろしいものを見る者の顔つきになり、「悪いことをしたぁ…」声を震わせ、「これは、売り物だぁ。ヒョウタンに、野生はない！」

知らなかった！　ヒョウタンは、人が種を蒔かなければ生えてこない植物だったとは！

それから私は、ヒョウタンのヒョの字を見るのも聞くのも嫌になった。

T太郎さんとおばけヒョウタンが、柳の木の下でゆらゆら青白く揺れている。ゆらゆら、ゆらゆら、オイデオイデ…。ヒョウタンおばけにとりつかれてしまったみたいだ。今ごろT太郎さんは、おばけヒョウタンの重さに耐えかねて…。

旧友から、マッチ絵展の誘いがあったのは、そんなとき。T太郎さんが長年描き続けたマッチ箱が、ヒョウタンおばけから救い出してくれるような気がした。

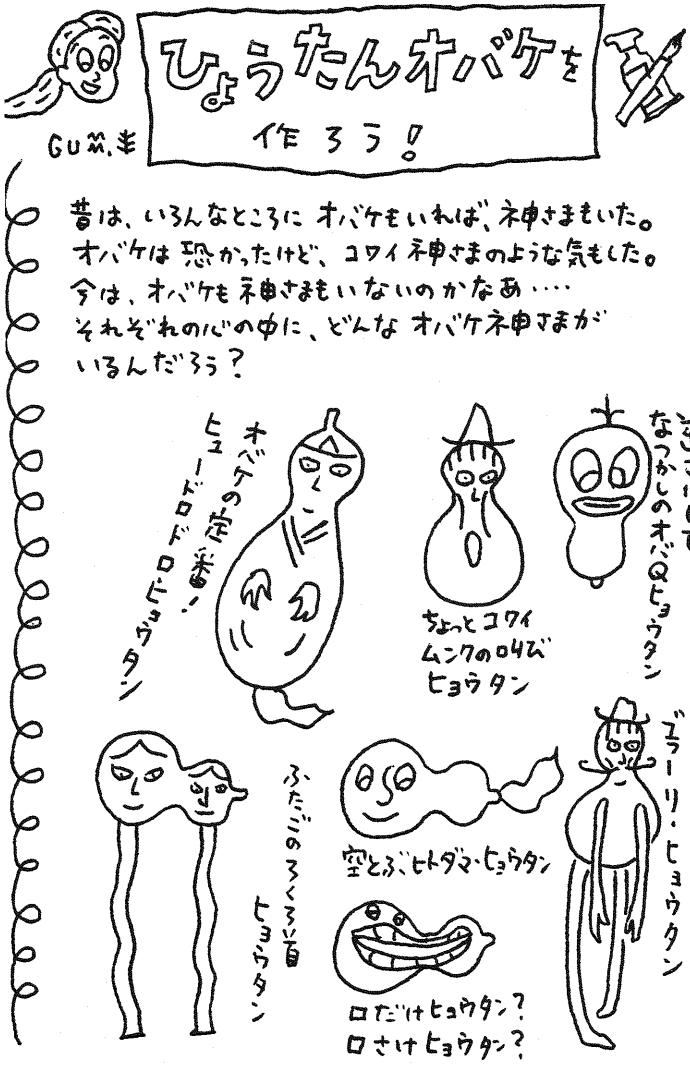
構想から一ヶ月。試作品が完成した。白い小箱に納まったマッチ箱。小箱のふたには、『あなたの心に火をつける　発破マッチ』のラベル。ふたを開けると、可愛らしい葉っぱの絵のマッチ箱。T太郎さんに捧げる作品なのだ。アトリエに遊びに来た友や仕事関係の人に見せると、「これは売れる！」。それからひと月かけて、大量生産に…といっても、手作りなので七十個くらい…。こうして、ヒョウタンおばけは、ゆらゆらゆらゆら、少しずつ遠のいて行った。

そんな或る日、叔母からヒョウタンが届いた。『ひょうたんを楽しむ』と題されたテキストブック付き。パラパラめくっていると、こんな走り書きが目に飛び込んだ。

「つるが青い内は、しゅうかくしない。枯れてから」

あぁ…と思った。悪いことをしたぁ。全身の血液が逆流し始めた。極度の罪悪感で頭がくらくらした。必死に『ひょうたんを楽しむ』を読んだ。そして分かった収穫時期とは！

「蔓や葉が黄色くなった頃。果実の肌は白くなり、幾分軽くなった感じとなる。初めての人


ひょうたんオバケを
作ろう！
GUMI
昔は、いろんなところにオバケをいれば、神さまもいた。
オバケは恐かったけど、コワイ神さまのような気もした。
今は、オバケも神さまもいないのかなあ……
それぞれの心のゆに、どんなオバケ神さまがいるんだろう？
笑さにしてなつかしのオバQヒョウタン
ちょっとコワイムンクのロりびヒョウタン
オバケの定番！ヒューードロドロヒョウタン
ながーい手足がゴラーリ・ヒョウタン
空とぶヒトダマ・ヒョウタン
ふたごのろくろ首ヒョウタン
口だけヒョウタン？
口さけヒョウタン？

は、葉が枯れてしまう直前まで成らせておくのが、無難である」

目の前が真っ白になった。あの時、ヒョウタンの肌は青かった。ずいぶんと実も重かった。葉っぱも蔓も青々とピンピンしていた。ということは…ヒョウタン泥棒のみならず、ヒョウタン殺しまでしてしまったことになる！

幼稚園では、ヒョウタン栽培は格好の教材になるのだと聞いた。

育てた実を加工して、世界でひとつだけのヒョウタンの入れ物まで作れるからかな、と軽く思っていたけれど、今やっと、その意味が分かった。…種蒔きから発芽。やがて花が咲き、実り、熟す。ここまでだったら、他の植物でも体験できる。重要なのは、その先…。実を採るためには、〝枯れ〟を待たなければならない。力強く生長した蔓や葉や実が、徐々に色あせ弱々しくなってゆく様に、みんなで立ち合う。ヒョウタンは、誕生から死まで、その全てを見届けた者にしか、我が子を委ねない。酸いも甘いも知り尽くした植物なのだ。

子どもたちは、ヒョウタンの枯れてゆく姿に、何を見るだろう？　感じるだろう？　生命の神秘、夢と現実の共存…？　なんと深い「ヒョウタン教育」！

ヒョウタンの原産地は、アフリカといわれ、太古の時代に、この地球上に広まった。縄文の遺跡からも、ヒョウタンの種や器に加工されたヒョウタンの実…。近所のお蕎麦屋さんにも！七味の入ったヒョウタンを見ると、未だに、穴があったら入りたい心境になる。

私も、「ヒョウタン教育」を受けていたら

なぁ。…ゆらゆらゆらゆら、今もヒョウタンおばけが揺れている。

ヒョウタンから駒！　を夢みて、『発破マッチ』をT太郎さんに、贈った。

（葉画家）

読者プレゼント

本文中に登場した『発破マッチ』を五名の方にプレゼント！

ご希望の方は日本幼稚園協会まで往復葉書にて八月末日までにお申し込み下さい。